

浄土

1995・6



諸行無常屋 武田泰淳◇吉田壽雄

私の法然上人研究◇中野正明

【連載】

仏法双六・浄土双六——大谷旭雄

楽屋ゆかた——関容子

教育の現場から——内堀照夫

念仏の系譜——須藤隆仙

共に生きる——御所野洋幸

誌上特設ぎやらい

忘れられた寺院◆横村克宏



咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。

ちょっと切ない、なつかしい。

いろんな話をしたり、聞いたり。

そんな何気ないことが、人と人との
固い絆の第一歩。

それぞれの人の、それぞれのお話に
花を咲かせるお手伝い。

安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。



0088-82 (無料)

または 0120-0088-82

●受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

■ 誌上特設ギャラリー ■

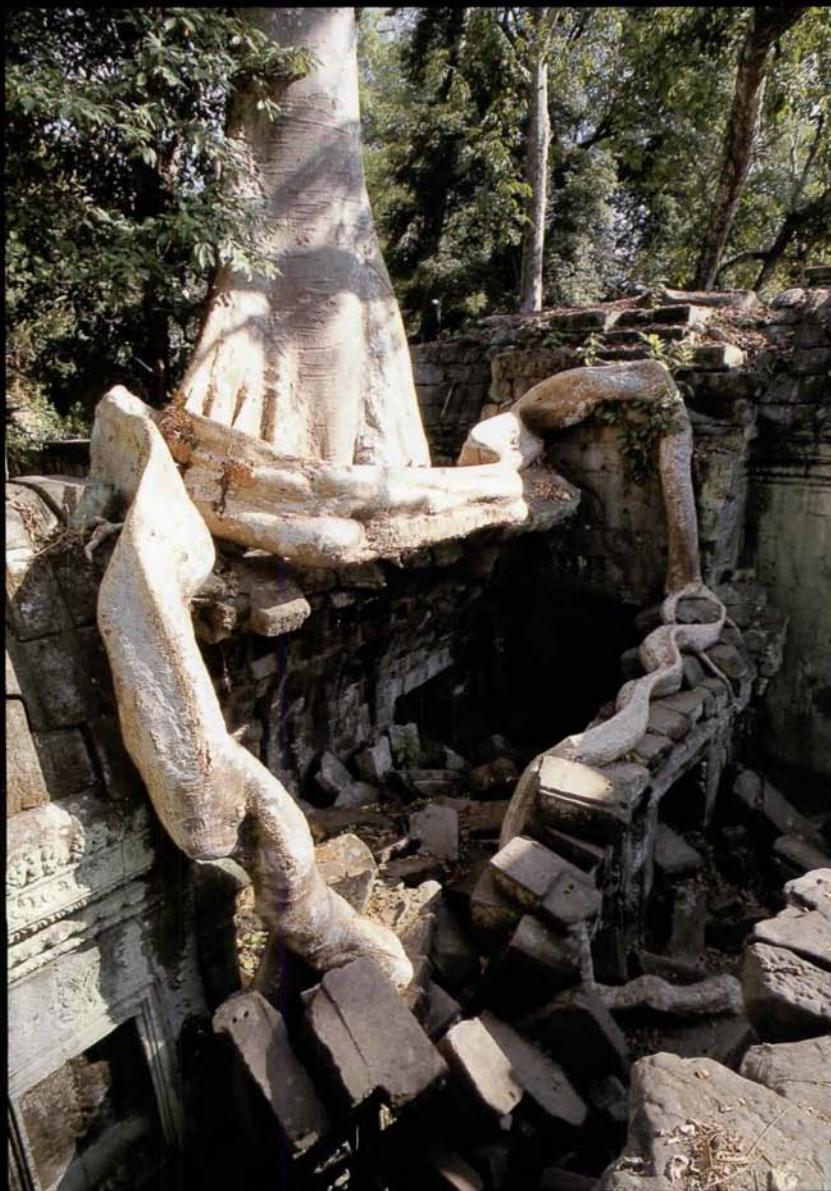
忘れられた寺院……
3

photographer

横村克宏



タ・プロム：カジュマロの巨大な木が、倒壊を防いでいる。その根は、まるで巨大な蛇のようだ。





東メボン：寺院を遊び場に行っている子供。手にしているのは、本格的なゴム銃でかなり強力。あるいは本格的なハンティングかもしれない。



東メボン：寺院の二段目の回廊、中央の塔が中央部。寺院の四隅には等身大の象の石像が配置されている。近くに住んでいる子供達の、絶好の遊び場となっている。

忘れられた寺院

タ・プロムの遺跡は巨大なスポアンと呼ばれるガジュマルの樹におおわれている。

けれどこの樹を伐ることはできない。このまま自然に残さざるをえないのだ。伐採すると遺跡そのものが崩れてしまうからである。

長い間、この巨大な樹木は石の建造物の破壊者であるとの汚名を浴びせられてきた。

けれども、最近の研究で実はそれは無実の罪であったことが判明した。彼らはむしろこの寺院の自然による風化を最もよく防いでいたのだ。

この寺院のある地域は、東バライと呼ばれる湿地帯になっており、雨季になると周辺は広大な池となる。

ここでは現在、修復というより倒壊の予防策を緊急に講じなければならないと思われる。

浄土



1995/6月号 目次

カラーグラビア忘れられた寺院	写真=横村克宏	3
諸行無常屋 武田泰淳	吉田嘉雄	8
私の法然上人研究	中野正明	16
仏法双六・浄土双六	大谷旭雄	24
楽屋ゆかた坂東橘太郎(二)	関 容子	32
教育の現場から	内堀照夫	40
念仏の系譜	須藤隆仙	48
コラム		55
表紙は語る 共に生きる	御所野洋幸	56
コラム		60
Jフォーラム		61
事務局便り		68
編集後記		70

表紙題字=浄土門主 中村康隆猊下

表紙撮影=御所野洋幸

アートディレクション=近藤十四郎

無常

諸行無常屋 武田泰淳

吉田嘉雄

すべてのものは変化する

変化するものは 互いに

関係しあつて変化する

よろこびも 悲しみも

変化の中にある

変化教信者 武田泰淳

武田泰淳さんの自伝風の随筆を集めた一冊の本、「身心快樂」があります。

これは、善導大師の日没礼讃偈の文から取ったものですが、泰淳さんはどんな気持で、「快樂」という言葉を自伝の表題とされたのでしょうか。

それはエッセイの中で、武田さん自身直接語っておられますが、私どもはこの自伝全体を読んで、理解してゆくことにします。

この自伝は、病床にあつた泰淳さんと夫人が相談して、自伝にふさわしいものを選んでおいたものです。

そして逝去された後、百合子夫人により編集刊行されたもので、「あとがき」に供養のためにまとめた旨、誌されているものです。

冒頭の文は、変化教信者と自ら銘うつての泰淳さんの人生観というべき、含蓄深い言葉だと思えます。

そして、「よろこびも悲しみも変化の中にある」の語は、武田さんを知る者にとっては胸をつかれるような思いです。

「変化教信者」で思い出すことがあります。

武田さんは、文壇のなかに多くの友人を持つておられた筈ですが、その友人の一人に、三島由紀夫氏があります。

思想的にも、文学者としてもかなり違った特色を持っていた二人ではありましたが、親しい友人であったこともまた認めてよいと思います。

ある時期、二人とも目黒に住居がありました。三島氏が大田区大森に、家を新築されたとき、特に招かれて食事を共にされたこともあつて、個人的にも親しかったようであります。

昭和四十五年十一月二十五日、三島氏は、陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地に、配下「楯の会」のメンバーと共に乱入し、自衛隊の決起を叫びながら自決した事件がおきました。

三島氏の葬儀は、東京築地本願寺で営なまれ、会葬者は七千人を超えたといわれ、ひとりの文化人の死を悲しんだことでした。

武田さんはこの葬儀に参列し、弔辞を述べておられます。

その要旨は「三島由紀夫氏の死のちに」として、昭和四十六年一月の『中央公論』誌に掲載されております。

少し長文ではありますが、文学者として、また友人として、また仏教者として悲しみを秘め切々たるところが溢れているものでした。

弔辞の最後に、自らを「諸行無常屋 武田泰淳」とし、宛名は「文武両道軒 三島由紀夫殿」となっておりました。

「変化教信者」から「諸行無常屋」と、少し格を上げての弔辞は、武田さんの面目躍如たるところがあつて、多くの人に感銘を与えたものでした。

更に、この弔辞について、友人である堀田善衛氏との対談「私はもう中国を語らない」の中で、法然上人の歌を引き合いに出されております。

法然上人が七十五才になられたとき、流罪となり、京都南鳥羽より四国へ出発されました。そのとき、弟子たちとの別離を詠われた、

「露の身はここかしこにて消えぬとも心は同じ花の台ぞ」の歌のことです。うつく

この世では、さまざまなことがあり、人の死もまたいろいろであるにしても、皆いづれ浄土で逢える身だから、嘆くことはやめましょうの意味ではありますが、武田さんも心からそんな気持で、三島氏を送ったことと思います。

そして、弔辞の最後に、ローマ字とひらがなと漢字で「南無阿弥陀仏」と書いたと、武田さん自身強い調子で語っておられます。

さて、この辺で、武田さんの略歴に少し触れてみたいと思います。

明治四十五年二月十二日、東京、文京区本郷の浄土宗潮泉寺に誕生し、後に目黒長泉院に移っています。

父は大正大学教授であった仏教学者大島泰信、母は大島つる。

永くドイツに留学せられ、帰朝後に、高楠順次郎、小野玄妙と共に『大正新脩大藏経』の編纂者となった碩学渡辺海旭師の妹が、泰淳さんの母上であります。

武田姓は、父の師僧にあたる武田芳淳師の名跡を継いだもののことです。

泰淳さんは、この両親を特に尊敬しておりました。父泰信さんの通夜の席で、浄土宗の偉い方々の前で、堂々と「わが父は、信仰の上からも、人間としても、当代随一の父である」と声を大にして宣べておられる泰淳さんの姿は立派なものでした。

母つるさんに対しては、美しく、賢くて素晴らしい母として、一緒に外出するのを誇りとしていたようです。

この他法類、親類には、多くの学者、住職、文化人等多数あつて、こうした人々に期待され、囲まれて成長されました。

昭和八年二月大本山増上寺において、伝宗伝戒を受けられ、浄土宗僧侶としての資格を得られました。

浄土宗では、念仏の教えと、仏教の戒を、人から人へ伝えてゆくことを、最も大切にしております。

一人前の僧侶となるためには、正しく浄土の法を伝える伝燈師より、直接に伝授せられるのです。

泰淳さんは、増上寺第七十八世道重信教大僧正より伝授されております。

泰淳さんは、文学の道を歩まれたわけで、増上寺で受けられた浄土の流れが、外面から見えなくなる時もありましたが、武田さんの身心には、終生その流れは絶えることはありませんでした。

戦争に兵士として召集され、中国大陆に征かれ、中国兵士の戦死者を何度か見たこともありましたが、中国革命者と交友を持たれたこともありましたが、日本が中国へ侵略して、不幸を中国に与えたことを身で体験され、悩み抜いた武田さんでした。

何度か死んでしまいたいと真剣に思われたようですが、人間として死に直面したとき、仏教者として、浄土教徒として、不思議な働きに支えられたものと思えます。

仏教という懺悔は、信仰の終点ではありません。懺悔の世界の向側に、尊い世界があるわけです。

終戦になり、武田さんの苦悩精進の生活は続きましたが、私は増上寺で僧侶としてスタートされて、文学と重なり合って歩んで来られた姿を立派なものと思っております。

文京区の誠之小学校、旧制京北中学校、旧制浦和高等学校、東京大学（中国文学）と秀才コースを進学されました。

浦高時代は、向学心旺盛で、学校の図書館で読書に明けくたようです。そのとき、中国の魯迅や胡適の文学作品に出合つて、次第に中国文学に傾倒していったようです。

しかし、昭和初頭より、日本も左翼運動の洗礼を受けることになり、折柄不況に見舞われたこともあつて、労働運動として、更に社会運動として盛んになってきました。

武田さんも、高校三年のとき、左翼サークルに入り、反帝、反戦のピラ撒きに参加していたようです。

東大入学後、中国文学を専攻されましたが、左翼運動に次第に深くかわり、昭和七年三月を以て退学されています。

この高校三年と大学一年の二年間の出来事は、武田さんの文学者としての性格を決定してゆく貴重な時期であつたと思います。

紙数も残り少ないので、武田さんの身辺におきたことを二、三追記しておきます。

泰淳さんは、昭和二十一年四月引揚げ船で上海から帰国されて、両親の居られる目黒長泉院に住んでおられたが、一方墨田区千歳西光寺（現住職古宇田亮順師）の住職を勤めておられました。西光寺は、渡辺海旭先生の寺でもあり、叔母かめ（泰淳母の妹）の住しておられた寺でもあるわけです。

叔母かめさんからの依頼で住職を引受けたのであります。ところが、泰淳さんの文学上の仕事も忙しくなり、昭和二十六年一月武田百合子夫人と結婚し、寺院生活と文学者とし

ての生活とが両立できず、二重生活を清算することになりました。

その頃、泰淳さんは、西光寺住職を辞任したい旨の手紙を、叔母かめさん宛で送っています。その手紙は「泰淳の詫び状」として伝えられているものです。

昨年（昭和五十二年）の七月だったと思いますが、長泉院で古宇田亮順師に会った折、本堂改築の際、書類の中から発見した「詫び状」と言われてきた手紙のコピーを頂戴して驚いたわけです。

二重生活（住職と文学者）に悩んでおられた頃を知っている私には、この手紙は、當時を思い出す貴重なものです。

泰淳夫妻の寺院生活に慣れたという努力は、たいへんなものでした。百合子夫人が、あの六尺塔婆をかついで、私の寺まで来られ「この塔婆書いて下さい」と頼み、書き終ると、それを持って長泉院に帰って行かれたことが何回ありました。

泰淳さんは、昭和五十一年十月五日逝去され、夫人百合子さんは、平成五年五月二十七日死去されております。

泰淳さんの生涯は、求道者としての人生だったと思います。敬愛した泰信、つるの両親、信じ愛した百合子夫人と愛娘花さん、好きだった中国、そして法然上人を慕う人生でした。

（東京・蟠龍寺住職）

特別寄稿

私の 法然上人研究

中野正明

昨年三月、浅学非才を顧みずに『法然遺文の基礎的研究』（法蔵館刊）なる小著を上梓させていただいたわけであるが、この度本誌への寄稿という貴重な場所を与えられたため、この機会に私が法然上人の研究を志すに至った動機的一端について披露してみようと思う。些か私情の交じった文になるものと予想されるが、ご寛恕いただきたい。

『法然遺文の基礎的研究』の「はしがき」（四頁）には、つぎのように記している。

古記録学の提唱者、古文書学者として名高い先生はこの頃、嵯峨清涼寺所蔵文書、奈良興善寺所蔵文書を中心に、つぎつぎと法然関係古文書類の実証学的論稿を公けにされていたこともあって、法然研究の遅れていることをもつとも歎いておられた。そして、博士課程に進む頃になると先生の講義内容は専ら法然関係の基本的文献の操作について論じられることが多くなり、遺言とまで聴講の学生を叱咤、浄土宗に所属する学生が成長し将来自分の墓前に一書を纏めて供えることがあれば、教師としてまことに本懐であると述べられたことが今もって脳裏に焼きついて離れない。

先生とは私にとって恩師と仰がせていただいている齋木一馬先生である。私は昭和五十二年大正大学文学部史学科日本史学専攻を卒業し、同大学院文学研究科修士課程に進学、齋木先生の講義を受講するようになって、それまで浄土宗寺院に所蔵する寺院文書を中心とした寺院史の研究を専門としていた者が、一転して法然上人の研究へと方向を転換するようになったのである。

先生が口癖のようにいわれた衝撃の言葉は今も忘れられない。「法然上人の研究は他宗の宗祖に較べて黎明をも迎えていない」といわれるのである。その詳細な理由については小著に譲るとして、要は法然上人の基礎的文献についての研究が甚しく遅れているという

ことである。それは大変なことだと思ひ、毎週の先生の講義には一言も聞き漏らすまいとの熱い想ひで臨んだことを思ひ出す。

そうしたなかで、奈良興善寺の阿弥陀立像の胎内文書のうち、正行房宛の親蓮や欣西の書状を取り上げられた講義内容は今も記憶に刻まれている。これら一連の書状はいずれも念仏彈圧の氣運の高まる元久元年（一二〇四）頃のものとして推定されたことは大きな意味をもっている。法然上人は南都北嶺の大衆への無用の刺激を避けるため、門弟らの京都集住を禁じて地方へ分散せしめたのであらうというのである。正行房は京都から奈良に下向していた法然上人の門弟であつた。

その親蓮書状には、

あいたしきもの、

くたり候なり。あひかまへて、

たうなんと、るすせさせて

おかせたまへ。こゝろはいなん

とも、おちしつたりたる人

にて候なり。あなかしこく。

又、いつころにかのほらせ

たまふへき。正二月にハいそき

のほらせたまへかし。（下略）

とある。この書き出しには、親しい者が今度京都から奈良へ移住することになったので、面倒をみてやってほしいと記している。そして、堂守などをさせてやってもらいたいと言

っている。ここには移住先の安穩を願う門人同士の親愛の情が偲ばれて感動を覚える。本書状は十二月十六日付であるが、新年早々の上落を促しているのは、門弟らにとって法然上人の健康状態がきわめて深刻に案じられていたためである。

法然上人はこの頃瘧病（マラリア）という病を患っていたようで、「おこり」という発作を繰り返していた。『拾遺和語灯録』収録の建久九年四月二十六日付「津戸三郎為守へつかはす御返事」等の記述によると、建久八年（一一九七）から翌九年にかけて法然上人は病気がちで一時は危険な状態にあったことがわかる。同九年正月に始まる三昧発得の体験、同三月の『選択集』の撰述、同四月の「没後遺誠文」の起草等は、そうした法然上人の健康状態のなかで行なわれた。実際にはこの瘧病は治病し大事には至らなかったが、法然上人はこの後晩年までの間、定期的に発病を繰り返したのであり、健康的にはお苦しい晩年であったものと察せられる。

ところで、もう一通の欣西書状には、

その、ちは、なに事も候はぬに候。

さは候へとも、ひしりのをんほうハ、

れいのさむけ二候。あひたはすこしつ、

ませ給（ひか）□候に候。もしとしあげ候ひては、

をこりやせさせ給ひ候はんすらん。その時は、

いそきく申候へく候。そのよういせさせ給ひて候へ。

たうしは、すこしもそのけはおはしまし候す。（候す）

さしたる事候ハす。春はたゝ、のほらせ給ひ候へかし。

いくはくかはをハしまし候へきと、あはれに

おほへ候に、かへすく、た、人ともおほへさせ給ひ候

らむ事の、あさましく候也。又、それにはなに事か

をハしまし候、おほつがなく候。又、なみたなから

くたらせ給ひて候事を、よによるこはれておはし候

事をも、とく申やるかたなく候ものかな。(下略)

とある。はじめに京都の状況の緊迫、師法然上人の容体などを伝えようと書きはじめられている。法然上人の病氣は「さむけ」とあるように、悪寒がしてふるえの出る病であつたようである。発病の間隔が少しづつ遠くなつてきたが、それは結局一時的なことで再発は避けられないという。そこで、急報次第すぐに上洛するようにとその用意を促している。本書は十二月四日付であるが、今はその気配を感じられないが、春には上洛していたであろうになるかもしれないと言っている。そして、師法然上人の余命幾ばくも望めないことを、きわめて深刻に受けとめていた。つづいて、正行房の方の安否を尋ね、涙ながらに奈良に下向したことを聞いて、法然上人が喜こばれていたことを記し、もつと早くにお知らせできなかったのが残念であると言っている。

これら二通の門弟の手紙から、法然上人と門弟の間に、また門弟同士の間に関愛の情の深さを偲ぶことができる。法然上人は当時弾圧の気運高まる南都北嶺等に対し、無用の刺激を避けるため門弟らの京都集住を禁じて地方へ分散せしめた。正行房も法然上人から懇ろに諭されて、涙ながらに奈良に下向していたのである。

これら興善寺文書については、齋木先生によって昭和五十四年発行の『日本仏教史学』



『四十八巻伝』(知恩院所蔵) 巻33 法然配流直前の門弟に法話の図

第一四号、同一五号に仏教古文書講座として詳細な考察のうえ解説を載せられている。

これら珠玉の論稿はまた、先生の一週忌を期して吉川弘文館から刊行された先生の著作集三『古文書の研究』にも、興善寺や嵯峨清涼寺に所蔵する法然上人、門弟証空らの書状に關するいくつかの論考とともに収録されているので、興味ある方は是非ともご一読をお薦めしたい。

それにしても、門弟達の間でもっとも大切な話題は法然上人の健康状態にあったことが手にとるようわかる。南都北嶺などの弾圧が強まるなかで、門弟達は京都に滞まることも許されず、地方への分散を余儀なくされた。さぞかし師法然上人への思慕の募ったであろうことは想像に難くない。困難な時期であればこそ、尚更に師弟間および門弟同士の絆は強く保たれたのである。

私は昭和五十七年に博士課程を修了すると、すぐにご縁をいただき総本山知恩院内にある華頂短期大学に奉職することとなった。離京を前に国立の先生のご自宅に挨拶のために伺ったとき、「贅沢な環境に身を置く分、精進するように」といった内容のことを言われたのも、きつと法然上人への思いからであつたものと考えている。

実際に知恩院の境内に位置する華頂短大は学園歌に謳われるようにまさに「偉いなる聖人の御遺跡」である。桜花舞い散る四月の御忌法要から厳肅なるお身拭の式、除夜の鐘に至るまで、法然上人への報恩謝徳の念を、季節感とともに身体一杯に感じながら学ぶことのできる学園である。

私は学習の成果が上がると、その抜刷りを必ず先生にお送りした。それは、先生からの感想ともお叱りともとれる一文の書簡をいただけるからである。それを楽しみにして論文

を書いたと言ってもよかった。内容はもちろん法然上人に関するものである。大学院時代の受講ノートを基本に肉付けしたもののばかりであったから、概ね先生の評判はよかったようである。しかし、昭和六十三年三月、私は抜刷りを送らせていただく大きな楽しみを失うことになった。

先生は晩年気管支炎を患われ、入退院を繰り返される生活を過ごされた。病室でも史料校訂の仕事を続けられたと聞く。遠く京都の地からは快方に向かわれることを祈るだけの身の上であった。そんな時に思い浮かんだのは、法然上人の身辺に居た親蓮や欣西が奈良の正行房に宛てた手紙の内容であった。講義内容も先生がお話になられた表情も甦ってきた。

私は勿論、正行房のように出来のよい弟子ではあり得ないが、涙ながらにただ京都に在住していても先生は何もお喜びになってはいただけないだろうと考え、東山吉水の地という贅沢な環境に学べる者の勤めとして、法然上人に関する研究の一書を纏めようと、先生の一周忌あたりから決心し原稿の執筆に着手したのである。

それも、先生が生前にもっとも歎いておられた基本的文献類の史料批判を中心とした基礎的研究を課題とした。結果的には先生の描いておられたものからは内容的に程遠いものとなったが、昨年三月、先生の七回忌までに何とか上梓することができた。そして、板橋専称院にある墓前に漸く報告することが叶えられた。私はただそれだけで満足だった。先生の学恩に預り、法然上人研究の発展に些かなりとも貢献できたことを誇りに思うからである。

今年も春の彼岸——。すぐに御忌法要を迎える東山。先生の想い出を胸に祖廟参拝に出仕する積もりである。(平成七年三月京都にて)

(華頂短期大学教授)

◆ ◆ ◆



◆

大谷旭雄

浄土双六のうちでも初期に成立したものはその最下段のどこかに必ず「永沈」（ようちん）という一区画がおかれており、これがこの双六を特色づけてきたところから、「永沈双六」とも呼称されていたのである。この佛教辞典にも見当たらない「永沈」の語源を探りはじめてからすでに長い年月が過ぎたが、未だに確かな根拠は浮んでこない。しかし、ごく最近になって、浄土宗七祖、了譽聖岡上人という方が至徳二年（一三八五）に著わされた『釈浄土二藏義』（二十卷）という書物の奥書にその一用例を見いだすことができた。いま、詳しいことはさておき、そこには「まさに四趣永沈の身とならん」とある。

ともあれ、初期の浄土双六は江戸時代、宝永の頃（一七〇四―一七一〇）を最盛期とし、正徳の頃には衰退しはじめ、文化・文政（一八〇四―一八二九）の頃には殆んど姿を消してしまったというのが通説であるが、そうしななかに、明治の維新をおよそ三十年後にひかえた幕末の弘化五年（一八四八）、突如と

して、『^{（浄土）}極楽道中図絵』と題する、一種の浄土双六が京都の無量庵から版行され、京都、大阪を中心として幅広く流行したのである。

この双六は「振り出し」をわれ／＼人間の住む「南瞻部洲」^{（なんぜんぶしゅう）}とし、その中心には大きく「心」字を描いている。また「上り」を「極楽世界」とし、そこには極楽の宮殿・楼閣を中心に蓮花がさき、鳥類が飛びかう極楽浄土のさまが鮮かに描かれており、いかにも浄土双六らしい。

この双六の区画は「振り出し」「上り」を含めて四十区画からなっているが、その下段の部分には地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天などの六趣。殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒などの五惡。貧・瞋、痴などの三毒を配置して、地獄への道すじを示し、また、上段の部分では傍らに自力難行の悟りへの道（聖道門）を示しながら、他力易行の救いの道（浄土門）を示して、「極楽世界」（上り）に向う極楽浄土への道中を明らかにしている。



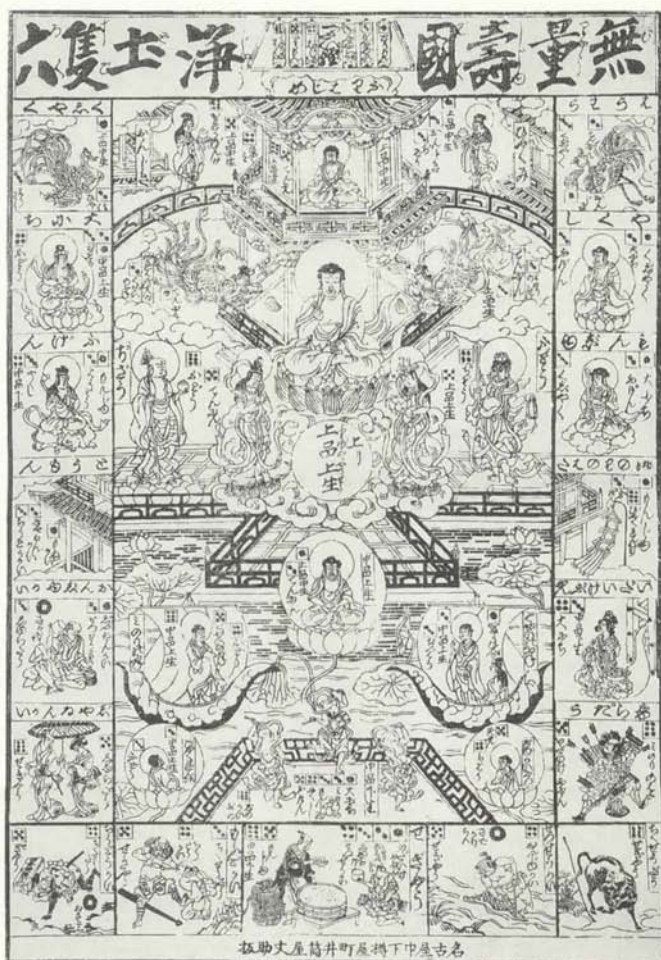
また、この双六はサイコロを用いず、易者えきが吉凶を占うときにつかう四本の算木を用い、そこにふりだされた信、疑、善、悪など四つの目と紙面の指示とによって、「上り」〔極楽〕を目ざして競うところに特色があり、また、四十に及ぶ区画に配置された浄土教用語を分析すると、この双六は一向宗（浄土真宗）の教旨に基いて組たてられていることがわかる。

この『浄土極楽道中図絵』は弘化五年に刊行されるや、幕末から明治の末年にかけて、改作、再版を重ねて広く、庶民や浄土教信者の間に流布したことが窺えるのであり、いづれ詳述する機会を得たいが、いまはその流通を通し、この双六にまつわるあれこれをふりかえってみよう。

まず、この双六は初版が刊行された弘化五年から十年を過ぎた安政五年（一八五八）に弘化版を基礎とし、その区画を四十から四十八に増補して再版されたが、これも京都、大阪の各地に拠点をおいて販売されたこともあつて民間に幅広く流行した。

話はかわるが、今年一月十七日、戦後最大の大地震、兵庫県南部大地震は神戸、淡路島を直撃し、死者五千九十四人、行方不明十三人、負傷者二万六千七百九十八人（一月三十日現在）に及ぶ大惨事となったことは記憶に新たなところである。

ところで、双六は庶民の遊び道具ではあるが、一方、その時々世相を映す鏡であり、また、世相をそのままに映すことにより一種のマスメディアの役割を果たしてきたといわれるが、もし、双六が昔のように庶民の間で盛んに行われていたら、このたびの大震災も早速、双六にとりあげられたにちがいない。安政版の『極楽道中図絵』は佛教双六ではあるがその例外ではなかったのである。つまり、そこに新たに加えられた剣難、雷難、風難、火難、水難などともに、ちゃんと地震の一コマを加えており、それは弘化版ののち、安政版が刊行されるまでの間に発生した、安政大地震に敏感に反応したことを示している。いま、伝えられるところによると、安政元年十



◆ ◆ ◆
一月四日には遠州灘を震源とする東海道大地震、翌五月には土佐沖を震源とする南海道大地震が襲い、それぞれ多くの犠牲をだしているが、さらに安政二年十月二日には江戸川下流を震源とする江戸大地震がおそい、死者は実に七〇〇〇人にも及んだといわれ、日本の全体が地震の恐怖に戦った。

安政版の『極楽道中図絵』は画工、黒河玉水によって描かれたが、その地震の項には倒壊する家屋、建物の下敷きになって救いを求める人、必死で乳のみ児を守る母親や逃げまどう人々などをハガキよりも小さい紙面にかき、地震の恐怖をナマ／＼と描写している。

いうまでもなく、地震には火災という二次的災害がつきものだが、いま、この双六にある火難の項には紅蓮の災火を背にして逃げまどう人々を描き、そつとひと言、「第一の事火の用心 死の用心御大切大切」と作者からの警告の声が添えられている。

また、地震といえば大正十二年九月一日に襲った関東大震災によって東京、横浜の二大

都市に壊滅的な被害をもたらしたことを想起せずにはいられない。この時にも幾つかの震災に関する双六が刊行されたが、その中の一つに『大正大震災双六』がある。そこにも地震を体験した人々がいだいた恐怖や混乱のすがたが描かれているが、とくに「ふりだし」を振って「ゆりだし」といつているのも地震の双六だけに実感がある。そして、その「上り」にはただ、安全という二文字を中心に、「財産、生命」とのみ記している。おそらく、この双六の作者は地震に対する平素の安全対策こそ財産を、生命をまもるのだと伝えたかったのであろう。

『善悪 双六極楽道中図絵』は明治の維新をむかえてもなお改作されるなどして再版がくりかえされていった。その理由は知り難いが、どこかにこの双六の魅力があったのであろう。明治十五年十一月、大阪に住した石川和助は絵を柏園直信にかかしめて、『善悪 佛法双六』と題する浄土双六を編集して版行している。その題名をみると、一見、勧善懲悪をか

かげた新たな佛法双六のように思える。しかしこれは先述した安政版『極楽道中図絵』によりながら、各区画の配置を独自に組み替えて改作したもので、内容的には安政版と何ら異なるものではない。

この双六もかなり一般に流布したと思われるが、私の手もとにもその一点があり、また、著名な書家であり、大正大学で教鞭をとられていた中村素道先生もかつて他の二、三の佛教双六とともに、その極彩色の一点を所蔵されていた。大書家と佛教双六との不思議とも思える出会いはどこにあったのだろうか。尋ねてみたいものである。

その後、十年ほどを過ぎた明治廿五年十二月、京都四条にあった綾喜助は『佛法めぐり』と題する浄土双六を発行している。これは明治二十年前後にはやった色摺りの濃い赤色の目だつ、赤絵といわれる錦絵で描かれているところに特色がある。この双六の配置は先に紹介した明治十五年版の『佛法双六』と全く同じであり、その内容をかえずに、題

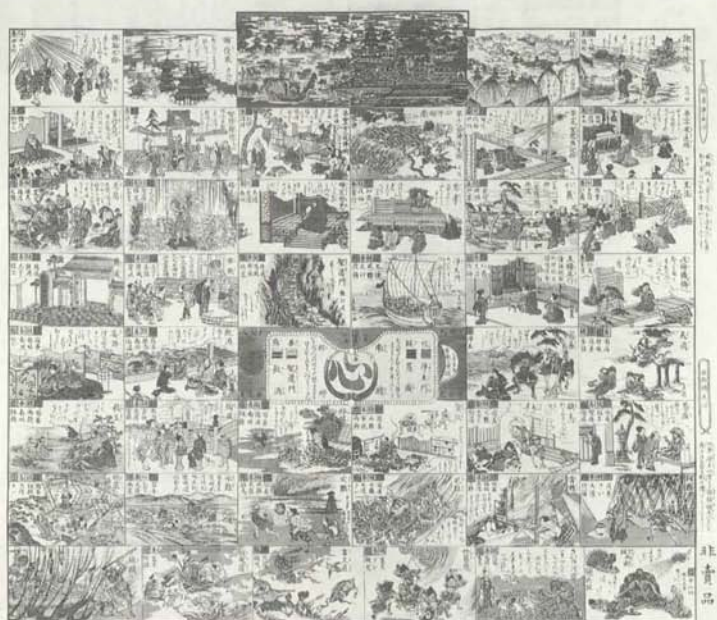
名だけを『佛法めぐり』と改めているにすぎないものである。

また、明治四十年の頃、弘化版『（複製）極楽道中図絵』が名古屋市西匠茶屋町にある浄土宗、得善院という寺から再版刊行されている。この得善院は敬虔な浄土宗の信仰者であり、熱心な念佛者であった坂文四郎氏（妻たね氏）の菩提所であるが、一人娘の常さんを失った夫妻はその菩提のためにこの寺を開基したという。その後、明治四十年三月、文四郎氏は他界され、浄土に赴かれたが、妻たね氏は夫の菩提を弔ったこの得善院を建立されている。

そのとき、たね氏は亡夫の遺志をついて、この双六を版行し、法類、信徒など有縁の人々に配付されたという。

この双六にはとくに一枚の「解説」が付けられているが、それによると、当院の開基、文四郎氏の信仰体験から得た信、疑、善、惡を佛教普及の考案、著作されたものであると記している。しかし、その内容は弘化五年版





の『^{善通}極楽道中図絵』と全く異なるものではなく、むしろこれを再版したものといつてよい。どこかで伝承に誤解が生じたのであらう。

この双六が算木を用いることは先述したが、その「解説」にはとくに「算木を振るせつ、南無阿弥陀佛と三度唱へてふるべし、其（功）徳によつて極楽往生必ず遂ぐべし」と念佛を唱えてから算木をふるよう指示し、また「惣て勝負など堅く禁むべし、若し犯せば佛の御罰をかふむるなり」とも註記している。称名念佛の相続をおこたることのなかった文四郎氏にとつて『極楽道中図絵』はすでに勝負を競う遊びの領域を越え、それはむしろ浄土の信心を深め、さらに自からの念佛生活をささえる安心決定の一端を明かす宗教的教材と化していたといえよう。長い私の紙双六の研究のなかで、『浄土双六』にうち興じた人々の種々相をうかがつて来たが、『^{善通}極楽道中図絵』という一枚の『浄土双六』を座右におき、算木をふつては己れの信心を確め、

ひたすら念佛の相続を重ねつつ、その「絵図」のごとくに一步步々極楽への道中を歩み続けた妙好の人は坂文四郎氏をおいてほかに見当らない。

なお、『浄土双六』の種類は決して多くはないが、私の手もとには徳聚院映範の考察した『浄土双六』（仮称）や『観経曼陀羅』の図相を念頭においてこれを双六化した『無量壽国浄土双六』などがあるが、いずれ機会をみて紹介してみたい。坂氏が所持した『^{善通}極楽道中図絵』にある「浄土門」の項には本願弘誓の帆船を描き「いそげ人、弥陀の御船のかよう世にのりおくれなばたれか至らん」とある。

（大正大学教授）

この原稿は四月号「仏法双六・浄土双六」の続篇として書かれたものです。前篇を御参考にしつつお読みいただければ幸いです。（編集部）



楽屋ゆかた



その九

連載

坂東橘太郎

(二)



関 容子

毎月歌舞伎座の初日に行つて、まず筋書を後ろから開き、先月出た役者の松竹会長賞と歌舞伎座賞の発表を見るのが私のワクワクする一瞬だ。この春に松竹創業百年を記念して、『忠臣蔵』『菅原』『千本桜』と、いわゆる丸本物の三大狂言の通しが連続上演されたが、三月の『菅原』の筋書を例によつて後ろから開くと、歌舞伎座賞に坂東橘太郎丈、と名があつて、とても嬉しかった。二月の『忠臣蔵』（討入）竹森喜多八役の演技に対して、と受賞理由にある。（会長賞のほうは四段目、石堂右馬之丞役の権十郎）

橘太郎に会つて、すぐにお祝いを言つた。

「泉水の立回りの竹森喜多八。小林平八郎と雪の中で大立回りをする。前々からやりたかつた役なんです。去年名題試験が受かつたとき、泉水の立回りがやれたら罰が当たつてもいいからやりたいな、つて言つてたら、本当に役が来ましたからね。辰之助さんが三日目に怪我をなさつて、その代役です。代役は三日御定法で、三日間は辰之助さんのところのお弟子がついてくれていい気分でした。

たけど、三日たつたらおかまいなし（笑）。そりや当たり前ですげね」

「三日御定法」というのは、本来は初日から三日以内に芝居の段取りが総て落ち着くことをさす。そのしつかり決まつた段取り以外のことをするのを「新狂言」という。たとえば楽屋風呂に勝手な時間に入つたりすると「馬鹿やろ、新狂言しやがつて。温泉じゃねえぞ」と叱られる。混み方が狂うからだろう。また出待ちの場所も、いったん決めたその月はずつとそこで待たなければいけない。みんなの段取りが崩れて怪我の元になるからだ。

さて横道にそれが「三日御定法」という言葉は代役をつとめる人への礼儀の意味でよく使われる。咄嗟に代わつて、一日目は何とか芝居に穴をあけないのが精一杯。二日目で少し調子がつかめる。三日目でやつとその役者らしい演技方ができる。だから一日だけ休演して、明日から出られます、では代役の人に対して失礼に当たると、というわけだ。

『妹背山御殿』で力者役を演ずる橘太郎の首をつかむのは松緑



「三日代わったところでそのまま本役になるかどうかが決まるんですけどね、竹森喜多八が本役に決まったときは嬉しかったです。稚魚ちぎよの会とか歌舞伎会で、一日だけいい役をつとめさせてもらう勉強会というのは、夢中のうちに終わってしましますものね。一月に名題昇進披露で『対面』の泰た野をつとめたとき。初日はコチコチですよ。高合たかい引に坐ってたって、足は今という形になっているのかどうか坐ってるだけで肩が凝っちゃう（笑）。中日過ぎるころになってやつと普通に出来ました。二十五日間つとめられる、つてのはすごいことですね」

ところで名題の昇進披露後の橘太郎は、あの胸のすくようなどんぼを見せるからみの役にはもう出なくなる、というのがちよつと残念。橘太郎の同門の大先輩に当たる故・坂東八重之助は、名題の適任証を持つてはいたが披露をせずに、生涯を名題下の大部屋筆頭で過ごし、立師たちしとして数々の立回りの名場面を工夫した。

「八重之助さんはばくの目標とも言える人だった

んで、披露をするのはよそうかとずいぶん迷ったんですが……」

と橘太郎は言う。

とにかく子役のころから歌舞伎座のどんぼ道場でよく稽古をした。そこで御曹司たちも一緒になつてどんぼを返っていたという。

「芯になる方もどんぼの稽古をしないと、立回りてかかれても間まを外しますからね。吉右衛門さんのどんぼは綺麗ですよ。大きいから豪快です。十五、六年前『土蜘蛛』をなさったとき、ぼくは小姓（源頼光の太刀持ち）で出てましたけど、吉右衛門さんは花道の引っこみの、形は消えて失せにけり……というところで、居ゐで返って三徳さんとくになって引っこんだんです。すごいなアと思いましたね」

居ゐで返るとは、立った場所で弾みをつけ、前へ返ること。「三徳」とは、片足を前に上げ、もう一方の足と両手の三点で体を支えて決めることだが、この「居ゐで立ち」というのがなかなか難かしいものらしい。



歌舞伎座のウラにある稽古場でとんぼの練習
をする橋太郎。このあと前に返り落ちする

「そうなんです。さっき言った八重之助さんでさえ、若いころ六代目（菊五郎）さんの『鈴ヶ森』に非人出て居るところ立ちのとき、『おれの刀見てりや大丈夫だから』って六代目さんに言われて、権八の刀の先を見るとスツと返れたんですって。そのうちだんだんいい気になったら、ある日刀をスツと引かれちゃって、ダダダツと崩れちゃった。『おれは返してもらってたんだな』って、八重之助さんが言っていました。ものすごい六代目崇拜の人でしたから」

それから「返り落ち」も難かしい。『蘭平』の立回りで屋根から石灯籠の上へ返り落ちしてそこからまた舞台へ跳び降りる二回連続返り落ちとか、『妹背山』（御殿の場）で、雛七ふかちちにからむ官女の緋の袴のままの返り落ちとかは橋太郎の名舞台だった。

『新薄雪』（物語）の除幕、清水寺の場で返り落ちしたとき、舞台中央の切穴（本ゼリ）の角がギザギザしてるところへ右足をぶつけて、あとで医者へ行ったら甲の骨が欠けてます、骨はどっかへ

行っちゃってますって（笑）。あんまり体にいい仕事じゃありません」

それから「返り越し」というものもある。四つ這いに身をかがめた人の背中を、走って行って跳び越える。三人いれば四人目に、四人いれば五人目のところに落ちるのがプロ。だんだん人数が増えて、七人返り越しなんてことになれば客席が涌くが、一人だけ越すのがこれで案外難かしいそうだ。「わあーって走って行くところある程度体が向こうに行きますけど、上に行く力はなかなかつかないですよ。『忠臣蔵』落人に、一人越すのがあるんです。勘平がちよつと身をかがめてよけると、そこを花四天の一人が返り越しするんです。ぼくがまだ返り始めのころで、勘平は中村屋（勘三郎）さんでした。エイヤツ、と張り切って返ったらはるか向うへ飛んでっちゃって（笑）。『どこ行っちゃうんだよ、うちやぎちゃん（橋太郎の前名）、すぐあとにあたしにかかる手があるんだからそばへ落ちなきゃいけないよ』って言われても、なかなかねえ」



昭和42年の初舞台は『盛綱陣屋』の小三郎役

こういう体力が物を言う舞台は、若いうちが花で、特に「返り越し」などはある時期を過ぎると出来なくなる。

橘太郎は名題試験に合格して披露をすませ、第一歩を踏み出してすぐに、代役の竹森役が認められた。罰が当たってもつとめたかったという役で、罰どころか賞をもらった。

「芝居以外何にも出来ないんですものね。子役でずっと出てましたから学校へちゃんと行ってません。漢字があんまり読めないんです。亡くなった（先代）辰之助さんが、お弟子相手に台詞合わしてて、そのお弟子が相手役の台詞で、『へい、おたいどうさま』って言ったら、『え？ そんな台詞あるか？ 見せてみな』って。これがお侍道様だったんです。『こりやあうさきにも笑われるよ、うさき呼んできな』って呼ばれて、『こいつがおたいどうさまだって。おかしいだろ？』『何ですか、これ。おさむらいどうさまですか』『えー!!』って楽屋を駆けまわって笑ってましたからね」

そして今回橘太郎に代役の機会を与えたのが、

現辰之助。立回り中に右の鎖骨を骨折した。

「代役が決まったとき、かみさんが『辰之助さんどうなさったの？』って訊くんです。かみさんは小学校からの同級生なんで、よくが字を読めないの知ってますから気が楽なんですけどね。『ああ辰之助さんね、左骨を折ったんだって。あれ？ 右側だから右骨かな？』って言ったら、駆けまわって笑って、『あんた粗忽ねえ』って」

橘太郎はこの笑い話を翌年日師匠の羽左衛門の楽屋で話した。自分の失敗談をこれだけ愉快に語れるのだから頭のいい人なのだ。橘屋は機嫌よく「アハハハ、だんだん役者のかみさんらしくなってきた。さすがお前の扱いに慣れているよ」

と褒め、しかしそれから立場上つけ加えるべきことを、ちよつと真顔でこう言った。

「だがなあ、少しは漢字の勉強もしなよ、もう名題なんだから」

（エッセイスト）

教育の現場から

自分と相手とを尊重した

人間関係づくりの

出来る子にしたい

—社会的技能を育てる—

ゆづび小さな学園 代表
大妻女子大学大学院非常勤講師

内堀照夫

互

一、相手との適当な距離が保てない

「なんかさ、高校とかの雰囲気うかがが分からないみたいで。で、従兄弟つか、親戚の人に聞いて見るとかしたじゃん。そうしたら『中学よりはたのしいかなあ』とか言うじゃない。なんつか、びっくりとか感じたりして『ほんとかなあ』とか。わかんないで、別にいいかとか思ったりして……」

三月末のある日、とりとめもなくお喋りする中学校卒業生の女子二人である。

「とか。とか思ってた。感じたりして。なんつか。みたいなの。いろいろあって。分かんない。別に。してみたら」これらを、単なる「若者ことば」として聞き流すことはできない。これらの言葉には、発言の内容を漠然とさせ、論理をあいまいにさせる働きがある。

親しい仲間では、出来るだけ自分の実態が鮮明にならないような発言の仕方を無意識に

行ってしまう子ども。相手との確執を避けるのに都合のいい方法であることをいつしか身に付けてしまった子どもの姿を見る。

親しいと思いつ込んでいた友だちとは、いつ如何なる時でも、どんなに些細ないさかきもおこさないように気遣い、べつたりともたれ合っていないと不安なのである。そこには自己認識の得られない子ども達の焦燥が表われている。

一方、同じ女子生徒が自分との関わりが薄いと思われる相手、例えば中学校教師のこととなると「あいつ、チョウキたねえ。頭にきちゃう。ムカつく。くそ。死ぬ。ぶっ殺すぞ」と、下品で暴力的な言葉を連発し、その人物の全てを否定してしまうのである。

いずれも、相手との関係に適度な距離を保つことができない、今の子ども達の人間関係の在りようが浮かび上がる。

互

二、会話にラリーが生まれない

小学校二年生の由利子は、お母さんの自転車の後ろに乗って登園する。

早春の暖かい日。登園中の空き地で摘んだと一握りの野草を持って来た。

「きれいでしょ。コップを貸して！お水に入れてあげましょ。」
と優しい。

「これは、ホトケノザでしょ。これは、イスノフグリ。これは、ムスズメノカタビラ……」

よく知っている。

それから一週間ぶりに登園した由利子に

「ほら、由利ちゃんが摘んできたお花、まだこんなに元気だよ」と指さすと

「当たり前でしょ！雑草だもん！」

と軽蔑の口ぶりである。

日常の会話では、無意識の内に話しかける

側は、応じる側の反応にある期待を抱き予想のようなものを持っているらしい。丁度球技のラリーのように。例えば「ほんと、元気でよかったね」「うん、うれしい」「草って、強いんだね」など、共鳴・共感を持った言葉が返ってくることを……。

由利子のは異なっていた。期待していた反応とはかけ離れている。たぶん子ども同士だったら「嫌な奴だ」と感じとって相手にしなくなっていくことであろう。

三、遊び仲間に入れない理由が分からない

由利子は、小学校一年生の三学期から本格的な登校拒否になった。友だちとの関係がうまくいかないことが主因である。一人っ子で知的に優れている。両親と四六時一緒に生活していて、夫婦の会話に顔を突っ込んで理屈の立った、言葉の豊富な大人のやりとりが、いっしょか頭に入ってしまったのだらう。

学校で同年齢の子どもの話すことは幼稚に見えてならない。「あなた、そんなことも知らないの!」「……当然でしょ」などと、

両親にでも言うように、あるいは日頃両親から言われているのと同じ調子で、友だちを傷つけてしまう言葉が、それとも気づかないままに口をついて出てしまう。

これは、他の子ども達からみれば鼻もちならない。「おまえ、何も出来ないくせに口だけは達者だな」と友だちを怒らせる。

しかし由利子は、相手がなぜ怒るのか理由がくみ取れない。「私のどこがいけないのだろうか。お父さんやお母さんは分かってくれるのに」一番身近にいる大人である両親には、ちゃんと通用することが何で友だちの中では通用しないのか、由利子は悩む。悩んでみたところ、解決される筈はないのだが。

四、「平等・公平・正義」が優先する

両親は「我が儘や甘えは一人っ子にありがちな最も悪い面」と由利子が幼い頃から心に留めて養育してきた。

そのこと自体には誤りはないのだが、それにのみこだわるあまり「優しさや思いやり」が育ちにくかった。替わりに「平等や公平や正義」が、時には「勝利」までが「善」正しい」として全面に突出した。

優しさや思いやりに根ざさない「平等・公平・正義」は、とかく他人を傷つけ自分を傷つける。これが身に付いてしまった由利子は、自分の感情や意見を、その場の状況に合わせて表現できない。「相手の心の痛みを自分の心の痛み」として受け止める感受性が充分ではないから、自分が採っている行為を省みても、誤りの原因を見つけ出すことは出来ない。その結果「悪いのは自分ではなくて相手に



ある」と結論することになる。そこで、分か
つてくれない相手に向かって、それまで以上
に「権利」を主張する。「私にも貸してよ。
私もやってみたい。私も仲間に入れて」など。
しかし、かえって子ども達は「仲間になんか
入れてあげるものか!」といった反感を増幅
するだけ。

すると今度は、権利意識の裏返しである被
害者意識に捕らわれて、権威者とおぼしき人
(教師・リーダー・大人・親)に訴える。い
わく「ちゃんとお願しているのに仲間に入
れてくれない。何にもしていないのに、いじ
める。私の使っていたものを取った」などと。
訴えを聞いて「由利ちゃんも仲間に入れて
あげてね」と短絡に指示でもしようものなら、
ますます「仲間はずれか、いじめ」に合うこ
とは明か。悪循環を加速させ、由利子を二次
障害へと追い込む。

小学校の三・四年生までの登校拒否にこの
ケースが増えている。



五、遊びへの参加に「権利」は通用しない

子ども達のつくった遊び集団には、楽しさの共有はあるが利害関係はない。仲間としての凝集力が強いから閉鎖性も生まれる。こうした集団に「権利」を主張して入り込もうとしても通用するはずがない。

ところで子どもが、遊びの集団に参加していく過程を観察していると、それぞれに個性を活かしたその子にふさわしいパターンが見られてはほえましい。

しばらく眺めていて、遊びのリズムに乗って「わたしも、いりれてー!」と、タイミングよく声を掛けていく子。

遊ぶ様子をじっと見つめていて、どこかのポジションならスムーズに受け入れられるかを見定めて「○○をするから入れてね」と売り込む子。

ボールが自分の前に転がってきたとき、そ

互

れを投げ返しながら、いつの間にか加わる子。遊びが都合よく進むための補助的な地味な立場をしばらく受持ち、誠意を示しながらやがてメンバーになっていく子。

加えてもらいたいそぶりを全身で表現しながら「入っていいよ」の声のかかるのを根気強く待つ子。など。

これらの何れもが由利子には出来ない。ある時期の由利子は「わたし、友だちと遊ぶの下手だから、犬を飼ってもいい。犬と遊ぶ」などと親にねだるようになっていく。哀れな望みである。悲しい選択である。

かつて「友だちと一緒に遊ぶ楽しさ」は、意図的に「学ばせる」性質の事柄ではなかった。しかし、少子化の現在「遊びに参加する方法」も学ばせる必要がでてきている。

六、社会的技能を育てる

最近、社会的技能（ソーシャル・スキル）

の未熟や欠如がとり沙汰されている。由利子の背負っている課題もこれに他ならない。

毎日の他人との関わり合いの中で、自分の感情や意見を、相手の心の在りようを気遣いながら、その場の状況にマッチした形で上手に伝えて、自分を尊重しながら快適な人間関係を創り出すノウ・ハウを社会的技能と呼んでいる。

由利子のようなタイプの子どもには、意図的・計画的な社会的技能の指導が必要とされる。「遊びの系」の基本的な指導階段を次のように踏まえて。

①本人の行為・行動を受容できる親（家族）・指導者との遊びを通して学ばせる。

本人が誰からどうされるのが一番うれしいかを見取って、本音で楽しむ遊びで自己表出させ、遊び自体から得られる快感を意識化させる。

②親（家族）・指導者は「遊んであげる」意識を持つてはならない。「一緒に遊んでし

まう」のである。真剣に勝負を争い、ルール破りなどがあつたら黙認しないで撤回させる。それでも聞き入れないときは、遊びを中止することも辞さない。

③親(家族)・指導者が勝負に勝ったときには、本人が勝ったときに見せる態度に似せて喜びを発散させる。時には、敗者へのいたわりの言葉掛けもして見せる。

④親(家族)・指導者が勝負に負けたときには、本人が負けたときに見せる態度に似せて残念さや悔しさを表情に表す。それに耐え克服する言葉や振舞いも見せる。

⑤親(家族)・指導者の他に、社会的技能の育っている本人と同年輩の子どもを二〜三名加えた小集団で、本人が興味を持つ遊びをして、②〜④のような態度をとって楽しさを高揚させたり、悔しさや残念さに耐えることを体験させる。

⑥時には、数人の子どもが楽しく遊んでいる様子を見させる。視線が特定の個人に片寄

るときは「みんな楽しそうだね」とか「和ちゃん、さっきは負けて悔しそうにしていたけど、今は笑っている。きつと勝っているんだよ」など、視点を与える。

⑦頼りにする気の合う友だちとペアを組ませて遊びに参加させる。喜びや悔しさを共有することで共感し合いながら、感情の表出方法を学ぶことができる。

⑧トラブルが起こることは必要なこととして遊びの過程に位置づけ、みんなて評価したり慰めたり方法を提示したりして、客観的に自分を見つける機会とさせる。

⑨仲間からの否定的な反応でも明るく受け止め、明るく対抗できる方法をモデルを抽出して学ばせる。

⑩これまでの段階を「子ども達だけの小集団」へと発展させる。

社会的な技能を単なる「世渡り上手」の技術としてでなく「人間らしさの表現」として会得させていきたいのである。



連載

念仏信仰の系譜

須藤隆仙

日本編

三

●天台の講師

前述したように平安時代、天台宗で浄土教を信じる風が盛んに起きてきたのでありますが、その中に源信僧都（恵心僧都）がおられ、この方は法然上人にも大きな影響を与えられました。その詳細は後述しますが、その他の方々について簡単に記しておきましょう。

伝教大師最澄の弟子に円仁（慈覚大師。七

九四一八六四）がおられますが、この方は遣唐使といっしょに入唐したさい、五台山に伝わる智顗創始の常行三昧の念仏を移入され、これが比叡山で行われるようになりました。

七日または九十日間も、念仏を称えながら阿弥陀様の周りを歩き続ける行です。ただし円に師はその念仏を智顗師のやり方でなく、浄土教僧法照師（中国編⑥参照）考案の五会念仏（節をつけた念仏）にすり替え、これを日本に伝えたのであります。浄土往生に関する著書もあり、念仏を称えて入寂されました。空也上人（弘也とも。九〇三一九七二）。

この方は天台宗といっても少し変ったお方で、行基菩薩のように道路修理・架橋・井戸

掘り・無縁遺骸の火葬などをして歩き、踊り念仏というものを弘めたのでした。それで阿弥陀聖・市聖などと呼ばれ、天台宗空也派の祖とされるのであります。踊り念仏は後述の一遍上人に受け継がれました。

千観師（九一八—九八三）。空也上人の弟子で、撰津箕面山に隠棲して専ら念仏を称え、阿弥陀信仰に関する著述をしました。

良源師（慈慧大師。九二一—九八五）。天台座主まで務めましたが、のちに災疫を払うため鬼になったといわれ、角大師だの豆大師だのといって民間信仰を集めています。極楽浄土のことを論じた『九品往生義』を著わし有名ですが、この方々も恵心僧都源信師の師僧なのです。

禪瑜師（九二二—九九〇）。黒谷に住み、良源師の思想を受けて『新十疑論』を著わしています。

寂心師（？—一〇〇二）。俗名慶滋保胤という文人で、早くから浄土信仰あり、在家の



身ながら『日本往生極楽記』を著しました。のち出家して天台僧となったのです。

覚運師（九五三—一〇〇七）。東宮大夫藤原貞雅の子で、出家して良源師から学びました。比叡山南谷の壇那院に住し、恵心師と並ぶ名声があり、この方の念仏を壇那院と呼び、恵心師のは恵心流と称され、恵壇二流という言葉があるほどです。『念仏宝号』を著して念仏をすすめています。この方は、阿弥陀仏やお念仏を、最高の価値高いものとして信受することに努力したお方です。

次に恵心僧都と良忍上人が挙げられるのですが、この方々については後に別説いたします。

●三論宗と真言宗の念仏

奈良時代から続いている三論宗のなかにも、念仏を称える方は絶えないでおられました。その有名な方に永観師がおられます（一〇三三—一一一一）。永観はヨウカンともお読み

しますが、京都の禪林寺は永観堂と呼ばれて
いますので、エイカンが一般的です。師は京
の文章博士源国経の子で、十一歳で禪林寺に
出家しました。禪林寺は弘法大師建立の真言
の寺でしたが、永観師が念仏の寺にしたので
す。若い永観は奈良で学び、深い浄土信仰に
入りました。のち東大寺の別所の光明山寺で
念仏生活をし、四十歳で禪林寺にもどったの
です。東大寺別当職（住職）にまでなりまし
たが、お念仏の書物を多く著し、臨終のとき
阿弥陀仏がお迎えに来るのを贅える迎講と
いうものをつとめました。この方は臨
終来迎に重きをおかれたようです。禪林寺は
のち浄土宗西山禪林寺派（後述）の本山とな
りました。

次に珍海師（一〇九一—一二五二）が出ます。
この方は東大寺や醍醐寺で学んだ人ですが絵
師春日基光の子で、仏像の図像学に詳しく、
その方でも名のある人です。深く浄土教に帰
依し、『決定往生集』その他を著しました。



真言宗のなかにも念仏信者が出ました。真
言宗に念仏信者がおつても不思議でないとい
うことは、中国編でもふれてありますが、弘
法大師に「空海の心のうちに咲く花は弥陀
より外に知る人ぞなき」という歌があるとい
う話まであるのであります。まず真言の念仏
者として名高いのは、覚鑠上人（興教大師。
一〇九五—一一四三）であります。宗教に
浄土念仏を加えた教えを説いて有名ですが、
その流を真言宗新義派というのです。

次に実範（ジチハンとも）という方がおら
れます（？—一一四四）。密教だけではな
く天台や律にも詳しく、とくに阿弥陀信仰に深
く傾倒し、浄土教に関する書を著しておりま
す。法然上人が教えを受けたとされています
が、疑問説もあります。大和中ノ川に中川寺
を建てましたので「中川実範」とも呼ばれて
おります。

以上のように、念仏を兼修される方が多い
のであります。

●良忍上人の念仏

さてここで、特筆しておかねばならぬ人に良忍上人（一〇七二—一一三二）がおられます。融通念仏（じゆんづねんぶつ）ということを創唱されたお方です。恵心僧都より生まれも没年もほんの少しあとの方ですが、恵心僧都は法然上人とご関係が深いので後に述べることにし、良忍上人のほうを先に記します。（若年には良仁と書いた）

良忍上人は尾張（愛知県）の人で、十二歳で比叡山（ひえいざん）に上り、壇那院（だんなゐん）で出家して天台学を修め、のち園城寺（おんじょうじ）で大乘戒を相承し、京の仁和寺（にんなじ）に行つて密教を学んだりしました。法然上人の最後の師僧であつた叡空上人はこの良忍上人に学んだ方でありました。良忍上人はまた、慈覚大師が中国から請来した声明（しょうみょう、仏教声学）をよく学び、天台声明中興の祖ともいわれました。しかし二十三歳の頃、僧界が乱れてきたので比叡山を去り、京都北の大原（おおはら）



に隠棲し、ここに来迎院（らいじゆうゐん）や浄蓮華院（じやうれんげゐん）を建て、もっぱら西方極楽往生を願う念仏を始めたのであります。そして四十六歳のとき、三昧（さんまい、精神統一）中に阿弥陀如来様から「一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行、是名他力往生、十界一念、融通念仏、億百万遍、功德圓滿」の言葉を感じ、これによる上人独特の念仏を称え出したのであります。上人のこの流れを融通念仏宗とか大念仏宗とかいうのであります。もつとも宗名を公称したのは明治七年ですが、大阪の大念仏寺を総本山とし、現在全国に三百五十余の寺があります。

これはまことに注目すべきことであります。天台宗諸師のなかでも良忍上人は、ついに独自の念仏を独立させて一宗の形にまでしたのであり、ここに、念仏が独立するまでに発達してきた事実を見逃してはならないわけであります。もつとも良忍上人の念仏義は、のちに毘沙門天（びしゃもんてん）の靈告を加えるなど、法然上

人が信仰した善導流の念仏とはだいぶ異なりますので、浄土宗の教えの中にこれが影響してはおりませんが、後に述べる時宗には影響しているのとあります。

法然上人の御伝記『勅修御伝・三六』には、法然上人が摂津の勝尾寺に一切経を寄付されたさいの法要に、聖覚法師が表白(趣旨文)を読んだとし、その文中に「良忍上人の融通念仏は神祇冥道をすすむれども、凡夫のぞみはうとし」とあったとあります。これを見ると、法然上人側からすれば、良忍上人のそれは一種独特なものと解されていたようです。ただ、その「融通」とは、一人で称えた念仏でも功德は万人に融通する、というのであって、これはこれなりに念仏の真価を発揮した教えなわけであります。

● 恵心僧都の念仏

前述したように、法然上人のお念仏においては、恵心僧都の存在が非常に重要なのであ



ります。僧都の僧名は源信ですが、比叡山の横川の恵心院に住したので横川僧都とか恵心僧都とか称されているのです(九四二—一〇一七)。以下「僧都」と記します。

僧都は大和国(奈良県)葛木下郡当麻に卜部正親の子として生を受けました。母が大変な信心家だったそうで、後年、僧都が皇太后に経を講じたときの下賜品を送ったところ、「母は名利を喜ぶような僧になれと望んだのではない」と諭した話は有名であります。

大変に聡明で、少年時、旅僧から「一二つと数えて九つまでつをつけていうのに、ただけどうしてつがつかないのか」とからかわれて、「五つにつが二つあるから」と答えた、などという逸話がのこっています。

七歳の時に父が死んだため、九歳で比叡山に上り良源師に師事し、十三歳で出家得度しました。とにかく秀才で、若年で皇太后に、『法華経』を講じたりしましたが、その後は栄名を避けて横川に隠れ、もっぱら著述と念

仏に明け暮れたのでした。著書は七十余部百五十巻におよぶといわれますが、中で最も有名なものが『往生要集』であります。この書は中国にも送られ、あちらでも大変に信奉されました。念仏の実践はこれまた大変なもので、前述の寂心らと念仏結社をつくってこれに励み、その指導者でもありました。『源氏物語』の横川僧都のモデルだといわれています。来迎図の創始者ともいわれ、阿弥陀仏像などでも恵心作と伝えるものが、たくさんございす。和讃も作っておられます。

『往生要集』(三巻)は、その名のとおりに極楽浄土に往生するための念仏行を説いた書であります。初めに地獄の様子が詳述されており、この面でも有名なものであります。この書はまた、法然上人が善導大師の著書に專注するに至った手引きとなったものでもありました。

ですから僧都の存在は、浄土宗にとりまして大変に重要な立場なのであります。親鸞聖



人は僧都を念仏高僧七人の中の一人に加えておられますが、法然上人はそのようなことはなされておりません。しかしこれは、僧都の念仏は善導大師の影響が強いことから、善導大師をお立てになれば、自ずから僧都も含まれてくる、というお考えでそうされたようです。

ここで、法然上人が僧都から受けられた影響の大きなもの二つを挙げておきたいと思えます。

一つは「念仏ねんぶつ為先いせん」ということであります。これは、阿弥陀仏の極楽浄土に往生させて頂くには、まず「念仏ねんぶつを先さきと為すな」ということで、如何なる行いよりも、念仏を真っ先にしなさいということであります。

法然上人の大切な著書『選択本願念仏集』には、最初にこの語が記されております。これはじつは恵心僧都がいわれた語でありまして、法然上人は「かの妙行業記みょうごうぎの文にも往生之業おんごうのぎよ念仏為先といえり」と明言されておら

れます(『勅修御伝・六』)。「妙行業記」は僧都の書であります。残念ながら現存してありません。しかし法然上人がはっきりこう仰せられておられるのですから、間違いないと思います。「往生要集」には別に「往生之業念仏為本」という語もあります。

次に「愚鈍念仏」ということであります。

法然上人の教えは愚鈍念仏ということなのであります。人間本来の愚かな自分に還つて念仏することであり。上人の御遺訓「二枚起請文」に「一文不知の愚鈍の身にして」念仏せよとお示しになっておられます。これはまた、「浄土門の修行は、愚痴にかゝりて極楽に生まる」との教えでもあり(『勅修御伝・二一』)。「還愚」とか「還愚痴」とか称して、浄土宗信者の基本的態度としてゐるのであります。これがじつは恵心僧都の教えの中にあるのであります。「往生要集」の冒頭は、まず「夫れ往生極楽の教行は濁世末代の目足なり」と始まり、諸教の深淵なるこ



とを述べて、「予が如き頑魯の者、あに敢えてせんや」と告白するのであります。かの幸田露伴までが「緻密厳詳の学風の人」と賛えた恵心僧都が、何で「頑魯」でありましょうか。しかし僧都は、他にもいたるところで、自分は愚者の下等な者だと発言しているのであります。法然上人はこれを尊く学んだのであります。

よく、僧都の念仏は価値低く説いてある、との説をみますが、そんなことはありません。ある人が「仏を観想しますか」と質問すると、「往生の業には称名(念仏)を足れりとす」と答えておられるのです(『源信僧都伝』)。ですから法然上人も、「源空は大唐の善導和尚の教えにしたがい、本朝の恵心の先徳のすめにまかせて、称名念仏のつとめ長日六万遍なり」「往生要集にも余行の中に念仏すべきたるよし見えたり」などと仰せられておられるのです(『勅修御伝・六、一九』)。

(つづく)

私事で大変恐縮ですが、とうとう先日、大きな節目となる誕生日を迎えてしまいました。皆からは「まだまだ若いよ」と言われるものの、自分にとっては「もうこんな歳か…」と感じざるを得ない、そんな節目の歳です。でも有難いことに、親兄弟そして周りの多くの方々のおかげで何とかこの歳まで生かせていただくことができたのです。深く深く感謝しなければなりません。

しばらくたったある日、經典をめくっていましたらこんな言葉に出会いました。

学ぶことの少ない人は、牛のように老いる。かれの肉は増えるが、かれの智慧は増えない。
〔法句經〕一五二

若和尚の

三 其 し な い い ト ャ ツ ャ

いよいよ大台に乗ったというだけでも十分にシヨックを受けていたのに、またあらためて大きなシヨックを受けてしまいました。「そういうえば最近、目立ってお腹が出てきたけど…」などとも思い、いつまでも若くはないと痛切に感じていただけにこのお釈迦様の言葉はその責祿の出できたお腹に、否、私の心にグサリと突き刺さったかのように思えたのです。

「生涯教育」という言葉がもてはやされて久しくなりますが学ぶということにおいて「もうこれで十分だ」ということはありません。本を開いて学ぶにしても、体を動かして何か技術を会得するにしても生涯の間にこの自分と接するもの全ては「学

ぶ」ことにつながっているはずで。しかし問題はそれに対する臨み方、受け取り方、要は自分の心掛けと日々の努力が大切なんだろうと思います。また、ただ単に「ものしり」になるために学ぶのでは寂しいものがありますし、自身にとって本当の意味での血肉とはならないものです。

さて…。大きな節目の歳を迎えたこの私はどうだろうか？

ふと現実気づけば、いつまでもお釈迦様の言葉に落胆している暇はなかったようです。「法門は無量なれども誓って知らんことを願う」という、毎日の勤行で唱えている四弘誓願の中のこの偈文の重さをあらためて知らされた今日この頃です。(正)

表紙は語る
共に生きる
ブナ原生林から

●
本誌表紙写真／文
御所野洋幸



森は水を貯え、土壌を作る。

地球温暖化の原因になっている二酸化炭素を吸収し、鳥獣を育て、プランクトンや虫の育成まで行ない、結果的には魚類も保護している。

その森の働きの要、それがブナの原生林なのだ。

樹齢150年のブナ1本で、約8トンの水を貯え、ヘクタールあたり年間10トン近い葉を落とすという。

雨が地表を走ることを抑えて洪水を防ぐブナ。果実は鳥獣を養い、落葉は土を肥やし、山菜や他の野草を育てるブナ。森の母、森の医者と呼ばれるブナ。そのブナと共に生き、写真を撮り続けるひとりの写真家がいる。

おばちゃんの木に 出会う

東京から二人の同行者が出た。岩魚を釣りたいと云う私の友人である。東北縦貫道を夜交替で休みなして運転をし、翌朝秋田県森吉町米内沢に着いた。森吉町の私の実家は父の代から写真館を営み、現在兄がそれを受けついでいる。

朝食もそこそこ、釣師二人を小又川の支流に案内し、私は山菜摘みをした。

山うど、しどけ（モミヂガサ）タラノメ、ホシナ（イヌドウナ）など私が山で簡単に調理出来るものだけを選び、二、三日で食べ切れる量に留意した。この時期、沢のそばでヒラタケ（キノコ）によく出会う。春のヒラタケは傘が十センチ程に広がったものでも虫がつい

ていなく、しっかりした肉質で実に美味い。

適度の山の幸に恵まれたので沢にもどると、二人の釣師はヒトリシヅカの群生しているそばで休息を取っていた。二人共三時間程で五、七匹と手頃の形をそろえていた。

その日は国民宿舎森吉山荘に一泊、釣師二人の釣果と、私の山菜の話して楽しい夕食をすませ早く床につく、翌朝早い朝食をとりブナ林のキャンプ場に向う。

林の中は若い緑一色になり、身体が緑に染るようだと釣師二人は子供のようにはしゃぎだした。ブナの葉は四、六センチ程に成長し小さい葉はまだ産毛が残っているが、大きい方は葉の表面につやも出始め立派な一人前の顔をしている。しかしまだ全体が柔らかく時折吹く風に葉は身体を丸める。

釣師二人をノロ川本流に残し（ノロ川本流は平成六年から禁漁）私は水芭蕉と神木に会いに行く。遅咲きの水芭蕉の花がなごりを惜しんでいるだけで、ほとんどが茶色に垂れ下

がり花が大きいだけに無残な姿である。かわりに葉は大きく膝上まで生い茂がり無残な花の姿を被い隠している。ほんのひと月たらずの間に自然は逞しい変化を見せていた。先月の感激をいま一度と思つて来た自分のあまさが恥しく足早にブナ林の撮影にもどった。

天気は曇りである。林の中はどんよりとした暗さで木々は雨を待つて休息しているように見える。林の中を歩き続けた。一度もシャッターを切らず歩き回っただけでキャンプ場にもどった。夕食の準備をしている所に釣師二人は笑顔で帰つて来た。一人が三十センチを超える岩魚を仕留め、あと一人は二十センチ前後のものを数多く釣り上げて二人共大満足である。一日中林の中を歩き回っただけでシャッターも切らずに帰った私は二人の賑やかな会話に入っていけず、ただ笑顔でうなづいているだけであつた。

翌朝釣師二人は東京に帰り私一人になった。朝から雨である。ロケハンの日ときめカメラ

笹藪で竹の子（ネマガリタケ）を見つけた二
三本採って前を見ると双子のようなブナの木
がある。一つの根から二本にわかれ、太さ、
木肌、色も同じで真直にのびている。きれい
な木だなあー、樹齢百年ほどかなあーと見上
げると、五メートル程の所に大きなブナの木
がある。樹齢四百年以上はたっていると思わ
れる古木である。根本から十メートルぐら
いの高さまでコブがついてデコボコしている。
上の方で二又にわかれ周囲を見守っているよ
うに見える大きさに威厳さえ感じられる大木
だ。側に寄って両手で抱きつくようにさわつ
てみた。私の身体が熱くなった。『おばちゃ
ん私が捜していたのはあなただよ』思わず叫
んでいた。今回東京を出る時から撮影の目的
に母のようなブナの木を、とそれを目標にし

ていたのである。おばちゃんの木の廻りを何
度も廻り、撮影場所、レンズ、太陽の位置な
どを決めキャンプ場にもどった。いつの間に
か雨は止んでいた。夕食は山の幸づくしの素
晴らしいものになった。

ミズナのタタキ。

シドケのオヒタシ。

岩魚の塩焼

竹の子とタラノメの焼物

山ウド

生の行者ニンニク

ミソ、ネ、ズ、合、え。

行者ニンニクとヒラタケのバター炒め。

竹の子と岩魚のみそ汁。

岩魚の骨酒。

森の医者 森の母とよばれるブナの木その
ブナの木之母に会えなうれしさと岩魚の骨
酒で気が高ぶり、東京の溜池にあるピヤレス
トラんで覚えた乾杯の歌をくり返し歌い、ち
よつとだけ山の生物の一員になれたような氣
がした一日であつた。

五月の連休にお坊さんが五〇人登場したテレビ番組が放映された。

司会者の質問に出演者が手元のスイッチを押したり、インタビュに答える番組で、夜の七時から一時間の番組だ。ご覧になった方も多いかと思う。

五〇人の出演者は毎回変わるのだが、この時は青年僧侶五〇人ということで、在来仏教の各宗派の青年が、(といっても五〇代の方もいたが)改良服姿で登場した。浄土宗からは九人が出た。

そのうちの三人がわりと親しくしている仲間なので、出演を決めた時、収録した直後、そして放映後に直接話を聞くことができた。

よく聞く話ではあるが、放映

のための編集でかなり多くの肝心な部分がカットされた、という。

戒名はお布施の額によって違ってくる、お布施次第でよい戒名がもらえる、といった戒名のところは大分カットされたらしい。逆にベントツに乗っているお坊さんというテーマでは興奮した司会者と、ベントツは格式が高いし、また壇家さんもそういう格をわたしたちに求めている、と主張するお坊さんとの激しいやり取りが、ほぼノーカットでオンエアされた。

確かによく聞く話ではある。毎朝前日の視聴率が机の上のせられていたテレビ業界では、視聴率第一で、内容の善し悪しや公平という視点はこの数字にかなわない。これは資本主義社

◆◆◆ テレビというメディア ◆◆◆

会では業界を問わず言えることだ。もちろん見る側にも問題はあるのだが……。

友人が言う、「あれでは真実が伝わらない」。確かに何の情報もなく番組を見たら、お坊さんの生ぐさや贅沢さが際立っていると感じるだろう。巷で聞いたお坊さんへの普通の人の見方も悪いものばかりだった。そういうえば最近発行されたお坊さんの生活の暴露本(?)も随分と偏っていた。(多分この本が番組のネタになった?)

それにしてもお坊さんがピンチだ。

今の社会は真実や信仰を伝えるにくい世の中だ。ピンチをチャンスに変えるには、やはり足元からなのだろうか。

(洋)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

寺庭

匿名希望・蓮門寺庭

だれがだれどなたがどなた知らぬままお辞儀している一日おわる

ここまでを今日ここからは明日にする決めたのになぜ終わらぬ掃除

朝七人昼十二人夜はその倍の食事の世話だけなのね

「あらまあまあ、あなたお寺のお嫁さん」ジーンズブルクの打たれ強さよ

和服だとなぜか機嫌のいい舅ちちの隣でちよつと舌出している

「怖いからちよつとお願い」手をつなぎ本堂までのとぎめきデート

姑ははと立つ厨房の床ぎしぎしと音立てている無縁仏と

晩春く立夏

誌 上 投 句

湖みずうみの霧のかなたに如来像

夏立つて地藏菩薩の衣がえ

児玉良男（静岡）

春の虹浜民村を跨ぎけり

西行のこころに触れし花の下

「津軽を詠む」吉田ゆき系（東京）

主婦として無常を説けり冷奴

南原香（佐賀）

一斉に置き傘揺らぐ五月闇

藤山加代子（滋賀）

居並んでムンクの叫び夏の靴

河野垂示（長野）

木耳に血筋透けゆく午睡かな

桑原淳子（群馬）

吊問の列揺がりぬ薄暑かな

宮部暢（千葉）

夜目に見ゆ風のとてがみ栗の花
郭公の啼く方へゆくはるかかな

児玉仁良（埼玉）

ありのままの自分を
愛してあげよう

ありのままの自分を
愛してあげよう

金盛浦子



ありのままの 自分を愛してあげよう

金盛浦子著

著者の金盛さんは、小学校の教諭を経て、現在東京心理教育研究所の所長をされている方で、少し前に『全青協』の『びっばら』誌で連載をされていたので、ご記憶の方もいらっしゃるでしょう。「母親は首に巻きつく蛇」とか「こんな母親が子供をダメにする」とか「子供を追いつめるお母さんの口癖」など、お母さんへの提言が多かったのですが、この本では女性自身の生き方への提言がなされています。

K
O
B

副題に「だじょうぶ、我慢しなくてもうまくいく」と書かれているように、我慢することよりもっと大事なことで、それは今の自分をそのまま愛してあげるのだと説いています。

そして感情を押し殺すことなく、素直に表現し、表に出すことが必要なことだとも言っています。

それはすべて、何よりも大事なことで、自分自身をありのままに見つめることから、出発するためだからと言うわけです。

いい嫁になろう、いい妻になろう、いい母親になろうとする強迫観念にも似たものに、いつも縛られているとしたら、どんなに辛いことでしょう。だから

らこそそこに愚痴が出てしまうのであり、毎日がおもしろくなくなってしまうのです。一度そういうものを取り払い、今までよくないこと、悪いことと思いつけてきたものに目を向けてみることも薦めています。

これは休日がなく、大家族との同居、広い寺の境内の掃除、常に壇信徒への気づかい、さわやかな応対など、ストレスのため放題の寺院の奥さんにとつて、是非お薦めする本だと思われまふ。

人間が自然体で生きることを読んでいるこの本は、形を変えた現代の仏教書とも言えるでしょう。

(大和出版・二二二ページ・税込一三〇〇円)



わが家の宗旨 浄土宗 日常勤行

宗徒のつとめとしての日常勤行。在家の信者さんにとってこの勤行の威儀作法を修得するのは大変なことだと思います。お寺によっては定期的に修養会や勉強会などを開いているところもあるようですが、そのときは覚えたつもりでいても、いざ家

に帰っておさらいをしてみようとするとなかなか思い出せない、あるいは、そういった勉強会に参加する機会もなく、どうやって覚えていいのかわからない…。そんな経験をお持ちの方も少なくないと思います。

昨秋、ビクターから発売された『わが家の宗旨 浄土宗 日常勤行』は、いつでも手取り足取り教えて下さるような、画期的な法式の先生といえましょう。香燭、三宝礼、四奉請にはじまり、三尊礼、誦経（四誓偈）から送仏偈までの一連の威儀、唱え方が実際の勤行風景を通して一般在家の方でも正しく身につけることができるように配慮さ

れております。

法儀師の福西賢兆先生が監修およびお導師を、田中正道・福西賢雄両上人がそれぞれ維那と式衆をおつとめになっています。

「二ころ」と「かたち」。違うようでいて実は表裏一体。

「二ころ」は「かたち」に現れ、「かたち」は「二ころ」を育むものです。日常勤行の威儀作法を調え、皆様の信心を一層深めるための良き助業となることでしょう。もちろん、本宗教師にとっても正確さをより高めるために是非ともビデオライブラリーに加えておきたい一巻です。ビクターエンタテインメント三分 税込み八八〇〇円

● 待望の J・FORUM (浄土フォーラム) 開設

「浄土」では、以前からご要望の声の多かった読者のコーナー (J・FORUM) を開設しております。短歌や俳句、書評、随筆や詩身近な出来事や情報など、左記の要領でどんどん応募下さい。なおタイトルは自由です。採用分に関しては記念品を進呈致します。

◆ 投・稿・募・集・中 ◆

1 随筆・詩など……四百字詰め原稿用紙十枚以内。
2 俳句・短歌・川柳など……二首まで。

3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりとお気軽にお聞かせ下さい。適宜。

投稿は随時受け付けております。ただし採否に關しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。秀作をお待ちしています！

● 読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。

① 六月号でもっともよかった記事。

② 今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容。

③ 法然上人讃仰会の活動として望むこと。

④ その他、ご意見、ご感想など。

を、官製はがきまたは FAX で事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力よろしくお願いします！ (住所、氏名、電話番号をお忘れなく)

● 七月号掲載・(暑中広告) 募集

「浄土」では、毎年七月号に会員の皆様方の暑中広告を掲載しております。体裁は名刺広告で掲載料は一枠三万円、また、六月上旬の締め切りとなっております。ご希望の方には詳細をお知らせ致しますので、お早めに事務局までお申し込み下さい。

●新会員募集のお知らせ

当会では随時新規会員を募集しています。檀信徒、お知り合いの方々にも本誌のご講読をお勧め下さい。また、ご寺院の皆様方には一般会員へのご入会をお願い致しております。一般会員の方には本誌を毎号五部お送りしておりますので、一層読みやすく、楽しくなったこの「浄土」を是非とも檀信徒教化にご活用下さい。

●新規会員紹介（敬称略、順不同）

＜一般会員＞

*宮城 第三組 雲上寺

＜講読会員＞

*東京 文京区 佐藤雅彦

*東京 文京区 桜内照子

*東京 城西組 延命寺

●会費ご請求のお知らせ

平成七年度の会費につきまして、近日事務局より会員各位に別途にご請求させて頂きますので、同封の振込用紙にてご送金下さい。なお、当会の

運営並びに「浄土」の発行費用は皆様の会費によってまかなわれております。請求書がお手もとに届きましたら、忘れずに、早めにお振り込み頂きますよう重ねてお願い致します。なお、ご不明の点がございましたら事務局までお問い合わせ下さい。

↓アンケート、お問い合せ、投稿は：
法然上人讃仰会

〒一〇五東京都港区芝公園四一七一四

明照会館内

TEL 〇三―三五七八―六九四七

FAX 〇三―三五七八―七〇三六



寺院生活者にとつて、六月という月は一年の中で数少ないのんびりした月と受け止めている方が多いのではないだろうか。

事実長期の旅行、特に雨の多い日本を離れ、海外などに行かれる方もこの時期が多いようだ。お盆前のほつと一息入れられる貴重な時といえる。

それだけ我が浄土宗においては、年間行事に係の少ない月であるわけだが、天台宗や、真言宗では大事な月である。四日は、天台宗の祖伝教大師最澄の入滅の日で、最澄忌であるし、十五日は真言宗の祖弘法大師空海の誕生の日で、青葉まつりといわれている。知識としては知っておいていいことである。

またマレーシアなどへ行くと十八日は観音菩薩の誕生日といわれている。十八日が観音菩薩の縁日であることは有名だが、六月十八日が誕生日と聞かされてびっくりした覚えがある。

ところ変われば教えもさまざまとはいえ、菩薩に誕生日があったのには驚きだが、親近感があつていいのかもしれない。むしろ人間を神扱いする宗教よりは健全であろう。

吉田上人に我が宗門人である作家武田泰淳氏について書いて頂いた。今後とも一時期住職をも勤めた武田氏自身のことや、また武田文学についてさまざまな人に書いて頂くように思っている。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川代潤

齋藤晃道

栗田順一

村田洋一

太田正孝

石上俊教

編集協力

オフィス 頼田代表 佐山哲郎

編集顧問

大室了暗

●お願い

町名変更や移転などで住所や電話番号が変わる際には、お手数ですが事務局までお知らせ下さい。本誌がお届けできなくなるなど支障が来すことがございますのでよろしくお願い致します。

浄土

六十一巻 六月号 頒価六百元
年金費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷—平成七年五月二十五日
発行—平成七年六月一日

編集人

宮林昭彦

発行人

牧田諦亮

印刷所

株式会社 平文社

写真植字

株式会社 シーティーイー

〒一〇五 東京都港区芝公園四七四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話

〇三(三三)五七八 六九四七

FAX

〇三(三三)五七八 七〇三六

LIFE TOGETHER



人間のやさしさをクルマに。

スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう。

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を造る最大の基準は、その姿とかたちである。
つくり手の強い意志が感じられる姿と、それを忠実に具現化した正統のファルム、すなわち、かたちである。
まず、姿がいい。かたちがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。 PHOTO: セドリックV30 ツインカムターボ プロラム

主な装備 ● V6 30DET (V6 ツインカムターボ・総排気量2960cc) エンジン ● 最高出力255PS/6000rpm (※NET値) ● 最大トルク35.0kgm/3200rpm ● フルレンジ電子制御4速オートマチック(E-AT) (※NET値) とは、エンジンを車両に搭載した状態とほぼ同条件で測定したものです。日産自動車株式会社お客様相談室 ● 全国共通フリーダイヤル0120-315-232 お近くのローレル販売会社へ。



ノドうつ うまさ。 黒ラベル

ただいま、渴いています。ビールを欲しがっています。

ノドが、体が……。さて、黒ラベル。プシュッノゴクゴクゴクゴク……。

「あーッ生きてよかったーッ」と、声が出る。

このうまさは、何なんだ。ノドたく快感、

駆けぬける爽やかな味わい。1秒1秒が、

たまらない喜びに満ちている。

この黒ラベルの味、ひとことというとう？

「ノドうつ、うまさ」それが黒ラベルです。

ビールは、20歳になつてからあきかんはリサイクルへ

●一協力の創製、自動販売機による酒類の販売は午後1時から午前5時まで停止となります。

新デザイン缶



サッポロ(株)黒ラベル

サッポロビール株式会社

